

GUEST'S COLUMN

来賓のご挨拶

祝 琵琶湖の波と風と共に100年

滋賀県知事

三日月 大造



琵琶湖ヨット倶楽部創立100周年を心からお祝い申し上げますとともに、今日までの倶楽部の歴史と伝統を築いてこられた関係の皆様的情熱に対して、深く敬意を表します。

長谷川名誉会長、青木会長をはじめ、歴代の琵琶湖ヨット倶楽部の会員の皆様には、県政の様々な面において、御支援、御協力をいただいておりますことに、厚くお礼申し上げます。

さて、琵琶湖ヨット倶楽部様は、大正11年(1922年)に創立され、現在まで100年以上の歴史を持つ、伝統のあるヨット倶楽部だとお伺いしております。100年前というと、まだ日本ヨット協会も発足していなかった時代ということで、まさに、日本のヨット文化を作ってこられたのは、琵琶湖ヨット倶楽部様であったのかと思いますと、滋賀県民として大変誇らしくあります。

琵琶湖ヨット倶楽部様の積極的な活動により、琵琶湖はヨットの聖地となり、週末には大小さまざまなヨットレースが開催され、ヨットを楽しむ方々がたくさんいらっしゃいます。琵琶湖を守り、活かすうえで、湖上スポーツは、非常に重要な要素であ

ると考えております。琵琶湖ヨット倶楽部様が培ってこられた知見を参考に、琵琶湖を「守る」取組と琵琶湖を「活かす」取組の好循環を創出してまいりたいと存じますので、引き続きの御指導をよろしくお願いいたします。

令和7年(2025年)の秋には、滋賀県で国民スポーツ大会および全国障害者スポーツ大会「わたSHIGA 輝く国スポ・障スポ」を開催します。セーリング競技は、ヨット8種目、ウィンドサーフィン2種目を柳が崎特設セーリング会場を舞台に熱戦が繰り広げられることでしょう。

昭和56年(1981年)の「びわこ国体」以来44年ぶりの滋賀国スポを皆様と一緒に盛り上げ、選手の皆様や大会を支えてくださる皆様にとって、思い出に残る大会にしていきたいと存じますので、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、琵琶湖ヨット倶楽部様のますますの御発展、会員の皆様の御健康とさらなる御活躍を祈念して、創立100周年記念のお祝いの言葉とさせていただきます。



2023年 SAIL おおつへのメッセージ



御祝いのことば (90周年記事再掲)
—琵琶湖ヨット倶楽部90周年に—
松井 明子 (旧姓:中塚)



昭和23(1968)年 BYCにて



1972年 BYC50周年記念パーティにて

華やかな21世紀初頭に生まれた日本の、京都の、滋賀の若者たちのさざ波のビワ湖を前にした遊び心から生まれた、琵琶湖ヨット倶楽部が、21世紀の今日、90年の年月をもって、多勢の会員皆様方、又関係の方々のお御努力によって尚今も生き生きと楽しい日々をもって存在しておられることを、心よりうれしく存じます。そして誇りに思います。

我が父、中塚善助らが話していたのを思い出すのですが、当時、瀬田でボートを漕いでいた京都一商のボート部の若者たちが、湖を風で走る三十石船の帆を見て、あれは漕がなくもいいのでしんどくない、あれにしよう！と云ってヨットに乗ることにしたとか。早速、船善さんたち船大工の方々の協力を得て、A級ディンギー、5米のヨットが出来たそうです。

やがて、柳が崎に艇庫が出来て先の戦争が始まるまでは、今でいうリゾートとして、私たち子供も母や姉たちと日曜日には、ヨットのお家へ京阪電車に乗って行ったものです。

戦争の後、昭和20年以降は、中支から帰った父に連れられて、新制中学生になった兄と弟と3人日曜日ごとに湖のそばの道を、進駐軍のトラックやジープに追い越されながら、炎天下柳が崎の艇庫へ通いました。

当時は、宮崎晋一さんのおられた島津製作所のヨット部、京都ヨットクラブと共に、同志社大、京都大、立命館大らの学生さんらを中心に、毎週レースです。艇庫の前が本部で、手作りの赤球が五ヶ挙げられ5分前、一つずつ降りてスタート、学生を育て、育てられ、ヨットの

人口を広げられました。昭和25年原爆の都市広島での国体には新制高校男子の種目が出来、兄が今のYYCの澤田明さんと出場し優勝、次の年、昭和26年、女子の種目が出来て、堀川高校に入学した私も、滋賀からの上田美智子さん御姉妹と一緒に、わからないままに、松島の海風の上でレースをさせて頂きました。男女平等の戦いで初めてヨットに乗る女性が全国に出来た年です。それから4年、西宮での国体まで毎年皆様に支えられて参加させて頂きました。実業団、大学、高校と、国体のレースと共に対抗レースによって育てられた若者たちが社会人に、父母になり、我が子供たちにもヨットを教え楽しませてやりたいと、森岡先生を校長さんにジュニアヨットクラブが出来ました。ジュニアには親が付いて行くことになっておりました。私の娘、松井春も参加させて頂き、毎週日曜日柳が崎ヨットハーバーに送って行くと、沖で指導してられるお父さんと子供たちを待つ陸でぼんやり帰浜を待つお母さんを見て、大丸ヨット部出身の山田佐代子たちお母さんを誘って、お母さんの会を作ろうと提案しました。日本ヨット協会の小沢吉太郎先生が少年少女ヨットに御尽力だったので、秋山福夫先生を通じてご相談すると、早速「白鳥の会」(あひるを育てる会)という会名を頂いて十人余りの会が出来上がり、40歳前後のお母さん、熟女時代は毎週日曜日が楽しみになり、ジュニアの合宿やレースの食事を用意する他に、トッパーに乗ったり、粉川龍之介さんのポーリバー号で、5月末のクルーザーフェスティバルに毎年出場して、楽しい時を頂きました。子供が卒業すると、毎年お正月過ぎ

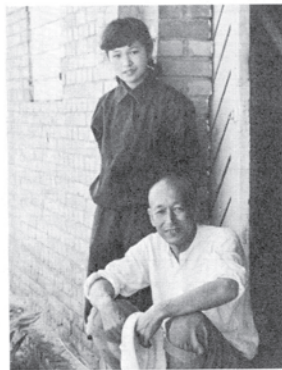
琵琶湖とヨットと父〔中塚善助〕

松井明子

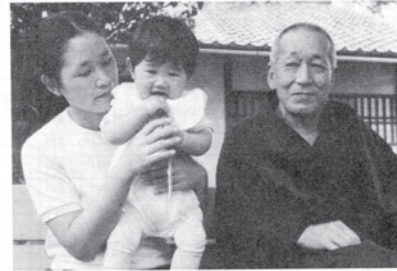
「お水取りやさかい——」京都では春寒のいいわけにこういう。盛会だった三月六日の京都での日本ヨット協会創立五十周年記念祝賀会の日も、快晴ながら風は冷たく、(早)朝には目にしみる白い雪が積っていた。「父の思い出を書く、それか頼の仕事だよ」久しぶりにお目に掛った小沢吉太郎先生が言われる。祝賀会では多勢の方々から「今日お父さんがいられたらなあ」と暖かいお声を掛けて頂いた。けれど私は、天国のヨットマン達と祝う父の笑顔、いつも背に感じていた。孤独で凜々しく水に浮ぶヨットのあるところ、そしてヨットマンのいるところに、父の姿を見る。それは災天の道を黙々と、修業僧の如くハーバーへ向かう父の姿でもある。

戦前—私の幼ない頃は、琵琶湖ヨット倶楽部のクラブハウスへ家族揃って出掛け、クラブの子供達と現在も湖を走るE.Z級ツエナーなどに乗せられて、楽しい一日を過ごした。その様子を16ミリのカメラで写してくれた父はいつも楽しげによく冗談を言って子供達におどけてみせたものだった。

中支出征から終戦と同時に京都室町の白生地師商に戻った父は、二十代で父親を失った一人息子のぼんぼん、几帳面で真正直、おだやかな口調ながら言い出したら何でもまげぬ、そして自らにも厳しい、頑固なまでの意志の強さは終生変らなかつた。帆走委員の父の判定に、口惜しい思いをされた方が、多勢いられる様だ。そんな一徹な父には、戦後社会の混乱の波は乗りにくく、厳しい顔の白足袋、角帯姿が京の底冷えの中にあった。



←柳ヶ崎にて父と



毎年三月十二日、奈良のお水取り満願の日は父の誕生日、その頃を境に水のぬるみ出した琵琶湖への「御出勤」が始まる。京津電車か山科をぬけて逢坂山トンネルを出ると、朝日に輝くさびなみの広がる琵琶湖が眼下に見える。進駐車のジープの行き交う湖岸道路の先の柳ヶ崎ハーバーには、青春を共に過した友人達と純粋で真摯な学生達、千変万化の自然との遊び、ヨットが待っている。毎日曜日、いつも決って玉子焼と山椒の入ったお弁当を持って琵琶湖へ行くのを、私たち家族は父の「御出勤」と言っていた。国体に女子の種目ができて、当時高校生だった私は、にわか仕立ての選手となって「御出勤」のお供をする様になった。好きな大工仕事の生かせる艇の修理、艇庫の整備、そして五分前に赤玉を上げるレースの運営など、ハーバーでの父は多勢のお仲間と囲まれて沖から戻って来ると小さな眼鏡を手に、温和な笑顔で迎えてくれた。「ヨットレースは、一度として同じレースがない。それがヨットの面白いところやー」そんなことを言っは、おいしそうに盃を重ねる父であった。

盃といえば、晩年、日本ヨット協会から頂いた功労賞の金盃で、母やお年始に集った兄弟達と祝ったあと、ピワコジュニアヨットクラブに入っていた孫である私の娘

に、「おじいちゃんからのお年玉ー」と言っは大切にしていた黄ばんだ「ヨット百科」を贈る好々爺でもあった。

満七十八才、文字通り安らかに逝って四年を経た今、ヨットという遊びを仕事とした父からは、うまい世渡りや裕福な生活を教えられることはなかったけれど、豊かな湖と素晴らしいお仲間にも恵まれて遊びに徹した、幸せな人の重さをかみしめている私である。

Yacht 記事 1983年5月 琵琶湖とヨットと父

仲間各地温泉に旅して楽しい思い出を作りました。今もお食事会の折にはその話題で笑いが絶えません。お母さんヨットの他に、レースに専念してオリンピックに出場された方もあり、多くの女子選手が生まれたことはいろく関心するばかりです。

こうした私の学校時代から現在に至る楽しい生活を思い出してみると、そこにはいつおBYCの皆様の温かいお力添えのあることを忘れてはなりません。先頃古い手文庫を整理していると、現会長の長谷川和之さんの父上、長谷川英一さんが、父に宛てられた手紙が出て来て、そこにはクラブの発展、会員に一人一人に話しかける言葉が綴られておりました。それと同じ様に、今の長谷川和之会長も、会員の方々にも、周囲の方々を同じ様に大切になさること、ヨットを大切に、楽しむ生活を自分から実際に行い、示しておられること、会の皆さんもそう

しておられるのを見て、それでこそこの90年があるのだと思います。どうぞ、その気持ちを受け継いで、百年、二百年と、琵琶湖ヨット倶楽部のあることを、心から念じる私です。誠にありがとう存じました。

Dear sailors of the Biwako Yacht Club,

N 40, "BALMUNG", 1933

President of the 10qm Racing Class Association

Member of the Union Yacht Club Mondsee, est. 1908

Member of the Union Yacht Club Stammverein, est. 1886

Artur Vlasaty (90周年記事再掲)



Dear sailors of the Biwako Yacht Club,

With deep respect and a smile on my face, I send my heartiest greetings to the Biwako Yacht Club, which is celebrating its 90th anniversary.

About 100 years ago sailing as a matter of sport was still young and only existing for the upper class of the society. Only temporarily halted by two world wars, sailing activity continuously increased, and finally after World War II became open for all as a pleasure for whoever wanted to follow its fascination.

Today there are thousands of sailing clubs worldwide where already kids get the chance to learn how to deal with wind and water on a sailboat. Most clubs are more or less young. But there are some that have quite a bit of history and the Biwako Yacht Club is one of those, no doubt.

It is well known that this sailing club is the owner of the historic 10 square meter racing dinghy of the Einheitszehner class, SVARA, built in 1939. This leads me to bring a review of the historic events starting shortly before the birth of the Biwako Yacht Club and dealing with the birth of the Einheitszehner.

On November the 27th, 1921, it was a Sunday; the German Sailors' Association (DSV) had its annual meeting in Berlin in Hotel "Kaiserhof". This meeting was a big moment also for Austria because the Union Yacht Club from Austria became member of the German Sailors' Association and had for the first time a seat and a vote in this meeting, where the following resolution was made: A category of "racing classes" for dinghies was created with subdivision into 5, 10, 15 and 22 square meter racing classes. The already existing 20sqm racing class was excluded, because the strong lobby of the 22sqm sailors were afraid of the competition that was coming up with the 20sqm boats that were and still are



N 40, "BALMUNG", 1933

the fastest racers with their light, long and slim hulls. The new-born 10sqm racing class got as a sign the letter "N" in its sail. (5 with "V", 15 with "M", 20 with "Z" and 22 with "J")

Before this day the 10sqm dinghies were listed in the category of the "Gig Class IV". Although their boat types been existing already years before, still, by definition the 10sqm racing class was created in 1921, one year before the birth of the Biwako Yacht Club. By the way, the oldest 10qm dinghy with measurements that is documented was built in 1909.

Until the 1920s the 10sqm was an open construction class with few measurement regulations only, like limited sail area. The engineers and boat builders had a wide field of experimentation, to make those boats faster and faster. This was the reason, the racing class was the most developed dinghy in those days and most sailors preferred this spectacular boat type.

At the early 1930s a new movement of sailors came up with the tendency to create a dinghy with precisely regulated measurements within the class. The idea was to figure out who the better sailor was and not whose boat allowed the best performance. Also the costs for newer and faster constructions became ever more prohibitive. Different constructions were tested in races and finally it was the design of Reinhard Drewitz from Berlin that became the definition for the "Einheitszehner", which had a measurement regulation in all details and was born 1931. The drawings for the Einheitszehner Class were published at the German Sailors' Association and the sign in the sail which had been "N" before, was now three connected rings. Soon the German Thyssen-Krupp Steel Company insisted on a change of this sign, because it was very similar to their logo. Therefore the inner lines of the rings got erased.

At this time about 350 boats of the 10sqm racing class had already



been built, and with the Einheitszehner formula another 100 new boats found its owner. The Einheitszehner was the first dinghy in sailing history that had a strict and limited measurement regulation in the German area. One disadvantage turned out soon. Since no technical improvements were allowed anymore, the engineers and investors lost their interest in this class and moved to other classes.

On the other hand a new Einheitszehner could be built for a reasonable price and became the most popular dinghy in those days. After the Olympic Games in Berlin in 1936 the Einheitszehner was elected to be raced for the next Olympic Games in Japan in 1940.

This must be the reason that Zenta Yoshimoto from the Japanese Olympic Team 1936 and member of the Biwako Yacht Club brought the drawings of the Einheitszehner home to Otsu and ordered the construction of SVARA in 1937. Unfortunately Zenta Yoshimoto was lost to us in World War II, the Olympic Games 1940 in Japan got cancelled, and also in Europe a lot of boats became victims of the war and were destroyed.

But SVARA survived in the Biwako Yacht Club and with her the original drawings of the Einheitszehner. Later it turned out those drawings were the last existing pieces.

Soon after World War II the Einheitszehner was not supported anymore in Germany and got finally erased from the class register in 1952. Only in Austria some sailors tried to give the 10sqm Racing Class a new future. There were already regattas sailed in a field of about 10 boats in 1948 in the open 10sqm Racing Class together with the few existing Einheitszehner.

In the mid 1950's synthetic materials came up in boating and wooden boats went out of fashion. Some boat builders and sailors in Austria tried to produce 10sqm boats built out of plastic, but with the other upcoming international classes like Flying

Dutchman, 470 etc., the final end of the 10sqm Racing Class was confirmed by the end of 1960s.

For almost 50 years there was no activity anymore in this class.

In 2006, Matthias Pechstein from Berlin, Thomas Koerner from Salzburg and I decided to give the 10sqm Racing Class a new lease of life. Wherever we met sailors from old days, we could feel that the spirit and the excitement for this class still exists and is big. Out of our idea we tried to find all boats that survived, to motivate their owners and to activate the old tradition also for younger generations. In our research activities we found SVARA from the Biwako Yacht Club in 2009. This was a sensation to us. I visited SVARA in Otsu in winter 2010 and found her in an exceptionally good original condition, such as I have never seen before.

In 2010 German, Swiss, Austrian and Japanese sailors sailed together the classic boats at the Austrian Classic Sailing Week on lake "Wolfgangsee" in old tradition. This great historic moment is hard to describe in words, because it was full of wonderful impressions, strong emotions and thrilling adventures.

Today the 10sqm Racing Class is back in life and with her a lot of sailors, who share and enjoy those wonderful masterpieces.

And SVARA showed us that she is more than just a beautiful boat. She is the entrance to wonderful friendships between sailors from different nation.

I wish the Biwako Yacht Club, all his sailors and their families that the spirit, the fascination and the tradition of sailing will always be a good partner in providing them with wonderful adventures und friendships beyond all borders.

Austria, 2012

